



『しろばんば』

(新潮社)

イラストレーター ^{は せ が わ よ し ぶ み} 長谷川 義史

子どものころから絵を描くのが好きで、毎日毎日チラシやカレンダーの裏に描いていました。だからというわけではありませんが、恥ずかしながら本はあまり読みませんでした。

“あの一冊この一冊”わが人生を変えた思い出に残る一冊、困りました。大人になってこんな質問がまっつていたのであれば、もう少し子どものころ本を読んでおくべきでありました、反省。

でも、人生が変わったほどではないけれど、思い出に残る本というのはあります。井上靖の『しろばんば』（新潮社）です。この本を読んでみたいと思ったきっかけは、中学校の国語の先生が授業で井上靖の『あすなる物語』の一部を教えてくださいましたからです。

作者の自伝的な少年時代の物語、大正時代の前半、伊豆の田舎の山村でおぬい婆ちゃん和暮らす洪ちゃん。

自分はまったく経験したことのない世界なのに、なぜかなつかしく、そして悲しくせつなく感じました。

本を読んだというよりも、映画を見たような、文章ではなく映像の記憶が残っています。

きっと、今の子どもたちが読んでもなつかしい気持ちになることでしょう。

今、自分が絵本を作るようになって、ちょっとなつかしい風景や子どもたちを描くのは、この『しろばんば』の影響があるのかな、なんて思ったりもします。